［特別活動］

自主的，実践的な活動を通して児童の自己実現を目指す特別活動の取組

－「プロジェクト活動」を三つの学校行事等に導入した実践から－

土屋　雅朗*

1　はじめに

ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）のＰＩＳＡ調査などの各種調査から，我が国の児童生徒について，思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題，知識・技能を活用する問題に課題が見られたり，自分への自信の欠如が見られたりするといった実態があがっている。文部科学省では，これらの実態や課題を踏まえ，平成20年３月に学校教育法施行規則の一部改正と小学校学習指導要領の改訂を行った。そのような中，特別活動においては，小学校学習指導要領第６章で，その新しい目標が次のように示された。「望ましい集団活動を通して，心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り，集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的，実践的な態度を育てるとともに，自己の生き方についての考えを深め，自己を生かす能力を養う。」（下線筆者）

当校は，新潟県佐渡島の中央に位置する田園地帯に立地し，児童数134人，７学級の小規模校である。保護者，地域住民は学校教育への理解があり，児童は温かな環境に囲まれ，素直で誠実である。反面，四方を海で囲まれていて他との接触が少ないといった地理的な環境の影響からか，様々な場面で「気後れ」「受け身」といった姿勢も見られ，自分で判断したり，表現したりする力が弱い。そこで，上越教育大学学校教育総合研究センター『教育実践研究第17集』『児童の主体性を育てる学校行事の取組－自発的な運動会計画集団＝「運動会プロジェクトチーム」の取組を通して－』（土屋，2007，pp.199-204）の教育実践研究の中で示されている自ら考え，計画し，工夫しながら実行する活動「プロジェクト活動」を当校の各種学校行事等に導入し，展開していくことで，これらの負の実態を改善するとともに，自主的，実践的な活動によって児童の自己実現を目指していきたいと考えた。

2　プロジェクト活動とは

「プロジェクト活動」（図１）とは，前述した教育実践研究で筆者が示した活動である。具体的には，「子どもたちが夢をもって，嬉々として学ぶ姿」を具現化するために，学校内の様々な活動を子どもたち自身が，自ら考え，計画し，工夫しながら実行する活動である。この「プロジェクト活動」を通して，様々な自己選択や自己決定の場を体験したり，自由な発想でアイデアを交流したりしながら，一人一人の子どもが自己実現に向かっていくことを目的としている。（いじめ防止学習プログラム・キャリア教育的視点ともリンクして）意欲をもっている児童なら，学年等にかかわりなく，自由にプロジェクトに参加することできる。また，このプロジェクトでは，目的を一にした自然発生的な異年齢集団ができあがり，子ども同士での学び合いも生まれる。その中での多様なかかわりから望ましい人間関係を築くことも目指しているものの一つである。

本実践は，前実践をさらに充実，発展したものである。前実践で筆者は，「児童の学校生活の，『点』である学校行事から，『線』である日常の生活に，本研究で意図したことを広げていくことが，これからの課題である。」と述べた。これに則り，児童が主体的に取り組み，自主的，実践的な態度を育てられるようなシステム「プロジェクト活動」を複数の学校行事や各種活動等にも導入，応用したいと考えた。そうすることで，児童は，自分で考え，自分で判断（選択）することを通して，自分に責任感が生じ，自分で実行することで達成感を味わうといった自主的，実践的な活動をより一層，経験することになり，それが自信につながり，自己実現を図ることができると考えた。

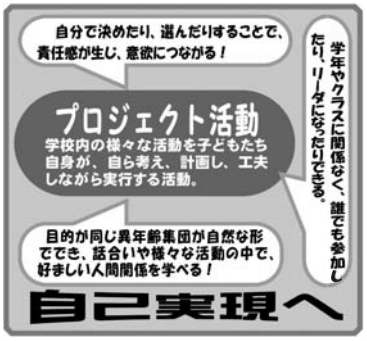

図１　プロジェクト活動

＊ 佐渡市立畑野小学校

3　研究の目的

「なすことによって学ぶ」という特別活動の特質を踏まえ，自主的，実践的な活動を通して，児童の主体性を重んじながら学校行事等を計画，実行していくプロジェクト活動を，複数の学校行事等に導入し，実践する。そのことで，より一層児童が自己実現を図り，前述した全国的な児童の傾向や当校児童の実態を改善することを目的としている。

4　研究の方法

トキ試験放鳥見学『わくわくトキトキプロジェクト』，６年生を送る会『ありがとう６年生会プロジェクト』，運動会『トキめき〇っ子運動会プロジェクト』の三つのプロジェクト活動の活動活性化を図り，その成果をプロジェクト活動への参加児童，教職員の取組や意識，また，保護者の反応などを通して検証する。

5　実践の概要

(1)　実践を行うにあたって

①　教職員の支援体制

かつては，学校行事等の活動を計画する場合，職員会議で担当者から原案が提示され，それを検討し，ある程度の流れが決まっていくのが一般的であった。その原案作成時の実態は，部内で検討がなされ，前年度の反省から少しずつ改善させてはいくが，前年度とほぼ同程度の内容に留まっていた。代々継承されてきている原案は，児童が主体で教師が陰に回った支援にあたるといったニュアンスが薄いことも少なくない。児童の自主的，実践的な活動を通して，その主体性をはぐくむことは，誰もがその重要性を認識はしているものの，具体的に計画を織り込んでいくことは，多大なエネルギーを要することもあり，大きく教職員側の意識の変革が求められてくる。特にこういった学校行事等においては，全校単位での活動が中心になるので，教職員間での共通理解の場や時間を意識的に多く設定する必要が生じてくる。限られた時間の中では，どうしても教師主導になりがちになってしまう。しかし，その結果，与えられた課題には，誠実に取り組むことができるが，自ら考え，計画・企画するといった実践する力や主体的に取り組む力が弱く，自己実現に結び付きにくいという児童の現状を把握すれば，現状を少しでもよりよい方向へ改善し，導いていかなければならない。こういった私たち教師の責務を再認識することと意識改革がこの実践の必要条件となる。以上の内容を職員会議で説明した。具体的な支援の構えとして，次のような共通理解を図った。各種プロジェクトが立ち上がった後，そこから派生したグループ等に１～２人の教職員が担当し，全教職員で児童の支援にあたる。そこでは，教師からの一方的な指示ではなく，児童と共に話合いを進めながら陰に回った支援に徹する。また，随時，児童の話合いの内容や活動の進捗状況を伝える「たより」をそれぞれの担当職員が発行し，情報の共有化を図る。

②　全校体制としての動き・支え

先回の「プロジェクト活動」の実践では，教職員間の共通理解，児童間の連絡等の場や時間が限定されてしまった。全校体制での動きが中心となるので，これらの共通理解は，密に行うことが望まれた。本実践では，その反省を受け，「プロジェクト連絡板」（写真１右）を校舎一階廊下に設置することにした。この連絡板には，各種プロジェクト活動や，そこから派生したグループが，その活動日時や場所，内容等を担当児童が明記した用紙（写真１左）を掲示する。このことにより全校児童，教職員が活動の見通しをもつことができると考えた。

写真１　プロジェクト連絡板

(2)　各種活動の実際

①　トキ試験放鳥見学『わくわくトキトキプロジェクト』

佐渡島では，平成20年９月25日，27年ぶりに国際保護鳥のトキが試験放鳥された。当時，島内では，その試験放鳥に向けての準備が各方面で着々と進んでおり，応援，祝福ムードとなっていた。

そのような中，担任している児童から「トキの放鳥場所に応援に行きたい。」との声があがった。これは，事実上のプロジェクト活動がスタートした瞬間である。（図２参照）早速，この児童と同じ思いをもっている児童らで担当教師の指導の下，話合いが進められた。昼休みを

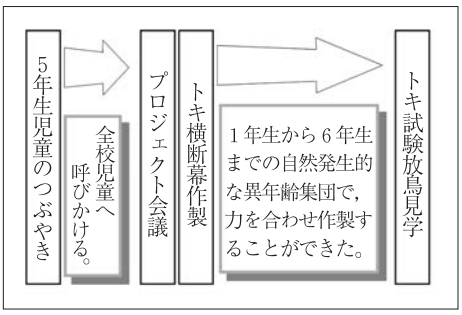

図２　わくわくトキトキプロジェクトの流れ

使ってプロジェクト会議を３回実施した。担当教師は，堅苦しくなく会議が進められるように何でも自由に思いや考えを発表することができるような雰囲気づくりに努めた。一人の児童が，「トキちゃんにお土産を持っていきたい。」と発言し，メンバーでお土産の内容についての話合いが進められた。「トキはドジョウが大好きだからドジョウを持っていきたい。」「大きなメッセージを書いて，現地で掲げたい。」といった思いを発表し合い，その会議では手作りメッセージを作製して持っていくことが児童によって決定された。次は，その手作りメッセージに書く内容についての話合いが進められた。「トキが佐渡の大空に飛んでほしい。」「学校に飛んできてほしい。」「赤ちゃんをたくさん産んでほしい。」等々，実に子どもらしい発想でたくさんの思いが表出された。児童が主体的に話合いを進めていき，手作りメッセージの文言が「トキよはばたけ佐渡から世界の大空へ」に決定した。児童は，佐渡の空だけに限定せず，世界の空へ飛んでいってもらいたいという子どもらしいダイナミックな思いに我々教師も感銘を受けた。作製作業では，人数が足りないので，昼の放送を使って全校児童へ呼びかけたり，各教室を回って直接呼びかけたりする児童と実に主体的に活動する姿が認められた。写真２からは，トキ放鳥現場で颯爽と手作りメッセージを設置する児童の様子が伺える。

写真２　トキ試験放鳥現場で手作りメッセージを掲げる児童（新潟日報社提供）

一方，教職員は，歴史的瞬間に立ち会うことは大きな教育的効果が期待できるとの判断もあり，参加計画が進むこととなった。しかし，ただ教職員側で計画し，「トキの放鳥を見に行きます。」と児童へ単純に提示するだけでは，児童はただ与えられた課題を消化するといった受け身な活動に留まってしまうことになりかねない。教職員は，指導しなければならない内容を適切に計画・検討する一方で，児童の自主的，実践的な活動の中で生ずる児童の思いや考えを，その計画に確実に盛り込んでいかなければならない。そうしたことで，児童は「ただ，なんとなく参加する。」といった受け身の意識から「自分たちで計画しているんだ。」といった能動的かつ主体的に取り組もうとする意識へ変わり，自主的，実践的な力が付いていくものと考える。

②　６年生を送る会『ありがとう６年生会プロジェクト』

当校では，特別活動の内容の中で児童会活動に位置付けされている６年生を送る会は，５年生が，計画・立案の中心的な役割を担い，最高学年なり全校児童をまとめていくための登竜門的な要素を含んでいる活動ととらえられている。そこで，この６年生を送る会においても，前年までの経験を生かしながらも一から自分たちで考え計画し，主体的に取り組んでいくシステム「プロジェクト活動」を導入し計画，実践することとした。今回のケースは，前述した趣旨を踏まえながら，５年生児童23人が中心となって学級活動の時間を充ててプロジェクト会議を行い，活動を進めていくことにした。そこでは話合いによる異年齢集団での交流は深められなかったが，５年生によるプロジェクト会議での決定を受け，他学年児童もそれに協力する形で異年齢集団による交流が深められ進行していった。プロジェクト会議で話し合われた主な内容は次のとおりである。

司会：今日の議題は６年生を送る会についてです。６年生を送る会について，思いや考えを発表してください。
・６年生を送る会の名前を新しくしたいです。なぜかというと，なんかはやく中学校へ行ってくださいという感じがするからです。・賛成です。みんなで６年生の卒業をお祝いするような名前がいいです。・今までお世話になったのだから，お礼を言いたいです。そういう名前がいいです。・６年生へプレゼントを渡したい。・６年生へ中学校でもがんばってもらえるような歌を歌いたい。・6年生がやりたいことをやりたい。・６年生がおどろくサプライズをやりたい。・体育館にきれいに飾り付けをしたい。・メッセージを書いて，大きい紙に貼りたい。（一部省略）
司会：それでは詳しく決めていきましょう。
○ネーミングについて…・名前を変えるのには賛成です。わけは，６年生をはやく送り出すみたいだから。・６年生を送る会の名前を変えることでいいですか？・賛成。（大多数）・さっきも言ったように，６年生をはやく送り出すという感じにもとれるので。→６年生を送る会の名前をかえることに決定。 ○プレゼント渡しについて…・プレゼント渡しは，いいと思います。喜んでくれると思うから。・プレゼントはぼくたちが作るのですか。・プレゼントを渡すなら，今までのように学年で決まっているものをプレゼントするのではなく，各学年に考えてもらった方がいい。・プレゼントは必要ないと思います。・どうしてプレゼントは必要ないのですか？・作るのが面倒だからではないのですか？・ぼろいからです。・ぼろくても気持ちが込められていれば，いいと思います。→プレゼントは渡すことに決定。作るものは，学年ごとに相談して決める。（プロジェクトが調整する。） ○歌について…・ゴーゴーゴーの替え歌は，みんなが大きな声で歌えるし，６年生への感謝の気持ちを歌詞で表せるしいいと思います。・去年は，コブクロの歌を大きな声で歌えたので，優しい気持ちの歌も歌いたい。・２曲歌えばいいんじゃない。・多数決で決めよう。→ゴーゴーゴーと優しい歌を歌うことに決定。 ○出し物について…・全校でやってみたい出し物を６年生に決めてもらうということでいいですか。・そうす

るとばれてしまう。・この会は，６年生をおどろかす会ではないので，ばれてもいいと思う。・６年生がしたいのをしてあげたいから，何個か選んでもらって，その中で決める方がいい。・逆に，一つ選んでもらう方がいい。・ぼくたちで決めるとぼくたちの会みたいになるからです。・三つの中から決めよう。①いくつか選んでもらってその中で一つやる。０人　②一つ決めてもらってそれをやる。18人　③二つ決めてもらって，その二つをやる。５人→６年生の会だから，出し物を６年生に一つ決めてもらうことに決定。　○６年生がおどろくサプライズをやることについて…・時間がないので反対です。私は，６年生に楽しんでもらいたいから賛成です。６年生の心に残る会にしたいから賛成です。・６年生がおどろくサプライズをやることに決定。　○メッセージを書いて，大きな紙に貼ることについて…・メッセージを貼れば６年生に喜んでもらえると思う。・紙がないので，全員が書けないと思います。・紙はたくさんあるので先生も入れて全員で書いた方がいいと思う。→全員でメッセージを書き，大きな紙に貼ることに決定。　○飾り付けについて…・体育館の飾り付けは，６年生に喜んでもらえると思います。→飾り付けをする。　（〰は決定事項）

話合いの内容からは，実に多様な思いや考えを発表し合うことができた。共にかかわりあい，折り合いをつけながらいずれも児童の中で話合いの内容を取捨選択していく姿が見られた。また，至る所に６年生に感謝の意をくんでいる内容が見られる。そして，自分たちで考え，判断して，会の骨格がこの話合い活動の場で決定していった。話合いで決定したことを受け，全校児童に協力を仰ぎながらそれぞれの班（図３参照）を立ち上げ，計画を進行していった。本部班は，全体の総指揮，ミュージック班は，替え歌の作成と練習。飾り付け班は，会場となる体育館の飾り付けに取りかかった。６年生への思いやりの気持ちから，６年生がやってみたい出し物を考えてほしいとの思いで，出し物班は６年生と綿密な打合せを行っていた。ネーミング班は，新しいネーミングに替えることになったことの全校児童へ対する周知とその募集を担当した。１～５年生児童から思いがたくさん込められた次の五つのネーミングがあがった。ア　卒業を祝う会　イ　６年生を楽しくする会　ウ　ハッピー６年生の会　エ　ありがとう６年生会　オ　６年生今までありがとう会である。臨時の児童集会（児童朝会）を開催して，１～５年生児童による投票が行われた。その結果，６年生を送る会の新名称が「ありがとう６年生会」に決定した。

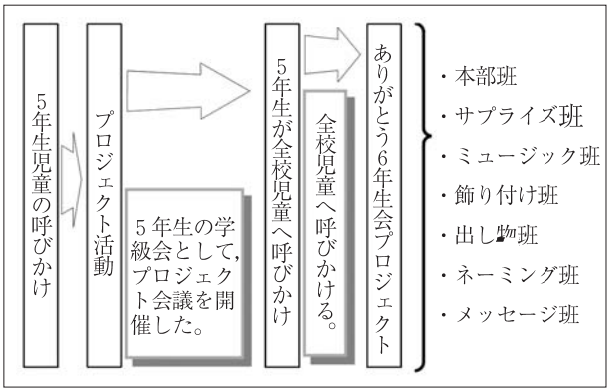

図３　ありがとう６年生会プロジェクトの流れ

メッセージ班は，巨大メッセージボード（写真３）の作成と全校児童からのメッセージの募集に取りかかった。全校児童と全教職員が６年生へ向けての感謝の言葉や，はなむけの言葉が次々と児童らの手によって作りあげられていった。ありがとう６年生の文字は，習字を得意としている児童が自ら願い出て，思いを込めて張り切って書いていた。正に，自分で決め実行するといった主体的な姿が見られた一面であった。当日の会の運営も意気揚々と児童が中心になり実践的に運営され，その姿からは充実感を感じとることができたと同時に，自己実現へ近づいていると実感することができた。

写真３　体育館壁面に掲示した巨大メッセージボード

③　運動会『トキめき○っ子運動会プロジェクト』

学習指導要領の改訂に伴い，特別活動においては，本年度（平成21年度）から新教育課程が先行実施されている。当校では，全教職員で，特別活動全体計画，各活動，学校行事年間指導計画を新学習指導要領の趣旨を十分に生かし，前述の二つのプロジェクト活動の実践を踏まえ，新しい時代のニーズに対応させる内容で作成した。本年度の運動会は，この新しい指導計画に沿ってを実施することができた。特に，プロジェクト活動を通して，ア「児童の自主的，実践的な活動を重視する運動会計画の立案」，イ「目的を一にした異年齢集団による話合いや各種活動の導入」を取組のポイントとした。当校では，運動会において，プロジェクト活動を取り入れての計画・実施は，初めての試みであったが，前述したプロジェクト活動を経験している児童らは，自分の思いや考えを意思表示しながら，意欲的に運動会プロジェクトを進めることができた。表１はプロジェクト会議から，運動会当日までの大まかな日程である。プロジェクト会議は，運動会について低学年から高学年まで児童の様々な熱い思いを話し合う会議となった。主な話合いの内容を紹介する。まず，自分たちの運動会のネーミングを考えあった。本年実施される新潟国体にちなんで「トキめき○っ子運動会」と決まった。また，昨年度まで学年部固定であり，教師主導で決定した種目を行っていた親子

種目を，種目の内容から自分たちで考え，さらに三択制にして，自分で選んで参加することになった。そこには，種目の内容を高学年児童が低学年児童に親切に教えるなど，異年齢集団による活動があった。そして，「佐渡を花いっぱいにしたい。」という一見，運動会と関係のなさそうな意見を，児童間でくみ取り合い，閉会式で運動会が成功した記念に風船の中に花の種を入れて大空高く舞いあげることになった。いずれも，児童自らの考えで実践された感動的な活動であった。

表１　運動会までの大まかな流れ

5月7日～	【運動会プロジェクト会議】 ・運動会の骨格が決定 ・３回実施 ・参加延べ人数106人
5月11日	【各グループ活動開始】 ・本部，スローガンネーミング，親子競技，用具，ラジオ体操，宣伝，得点，放送，応援団の８グループ結成。（担当職員の配置）
5月14日	【運動会集会（臨時の児童集会）】 ・運動会の名前，スローガンの決定 ・各グループからの連絡や要請等
⇩	（新しくなった親子競技の募集や説明会といった各グループでの活動）
5月31日	【トキめき○っ子運動会】

6　実践の成果と考察

⑴　トキ試験放鳥見学『わくわくトキトキプロジェクト』

わくわくトキトキプロジェクト活動で手作りメッセージを作製している様子をＢＳＮ新潟放送局が取材に訪れた。作製の合間に児童らはトキの放鳥に対する期待やプロジェクト活動の取組などを意気揚々とインタビューに答えていた。その放映を見た児童らは，ますます自分たちの活動に自信をもつとともに意欲の向上につながった。以下は，トキ試験放鳥見学後に児童が書いた作文である。

（省略）トキが飛び立ちました。なんだか，私たちが作ったメッセージボードを見ながら，ぐるっと回って飛んで行ったような気がしました。うれしい気持ちになりました。（省略）テレビ局からインタビューされました。緊張してあまり話せなかったけど，プロジェクト活動のことを話しました。よかったです。（省略）　（下線筆者）

「うれしい気持ちになりました。」との表記から，自分の意志でプロジェクト活動に参加し，自分で考え，実行したことに対する満足感や達成感を感じとることができた。また，「プロジェクト活動のことを話しました。」と書かれているように，その活動が本人の自信につながってきているととらえることができる。

このように，今回のプロジェクト活動を通して，トキへのお土産を何にするかといった自己選択や，どういう文言をメッセージに記すかといった自己決定の場を体験したことで，児童の自己実現に近づけることができた。

⑵　６年生を送る会『ありがとう６年生会プロジェクト』

当日の司会を担当している本部班の児童は，担当教師の指示を受けることなく，自分たちの考えで終始進行することができた。担当教師は，児童がつまずいた場合の対応策を考えながらも，その姿をできる限り見守ることだけに務めた。「先生，あっちで見ててね。」といった本部班児童との自信に満ちた会話からも児童が自己実現へ向かっている姿を確認することができた。また，参加していた保護者（６年生保護者）からは，「子どもたちの心が一つになっていたすばらしい会だった。」「思わず涙が出てきました。ありがとうございました。」といった好感的な感想を多く寄せていただいた。教職員の評価としては，次のような内容があげられた。

○　５年生の自主的に取り組んでいる姿が立派で，一人一人が自分の役割をしっかり果たしているのが感じられました。
○　６年生ありがとうという気持ちが伝わるよい会でした。子どもたちで作りあげた会になっていました。感動しました。
○　アイデアにあふれた会でした。六送会については，いろいろなやり方があるのだと思います。
○　壁面のメッセージが手作りの温かさがあり，卒業式まで掲示しておけるのでとてもよいと思いました。
●　５年生がこの経験をもとにして成長するということもあるが，負担が大きすぎる。　○…肯定的　●…改善点

上記の結果から，おおむね肯定的な感想が見られた。一連のプロジェクト活動を通して，教師側の意識の変革が少なからず見られるようになった。それは，指導しなければならない内容を適切に指導すると同時に，児童の自主的，実践的な活動の中で生ずる児童の思いや考えを，くみ取りながら，児童自身に自己決定，自己選択の場を促すといったような，支援の仕方に変化が生じてきた。しかし，一方で，多忙感や負担感をあげる教職員も見られた。前述したことからも，確かに，児童を主体に考えさせ，自主的，実践的に活動できる場を設定し，そこに教師が陰に回った支援にあたるといった指導体制は，とらえ方によっては，準備段階での時間が増幅し，負担感が増す感覚を覚えてしまう場合もあろう。しかし，そうすることによって，児童に主体性や積極性，能動的な力が付き，自己実現に結び付いていくことであれば，我々教職員の意識を改め，確実にその職責を遂行していかなければならないと考える。

(3) 運動会『トキめき○っ子運動会プロジェクト』

運動会に向けたプロジェクト会議での話合い，種目内容や出場種目の決定，閉会式のセレモニーに至るまで，様々な場面で自己選択や自己決定の場を体験することができた。また，プロジェクト会議で児童からの「応援団でおそろいのＴシャツを着たい。」という要望を受け，そのＴシャツを東奔西走しながら揃え，協力し合ってプリントのアイロンがけ作業を行う教職員の姿があった。児童は，自分たちの願いを教師が形で答えてくれたことに感謝を表現し，大喜びでそのＴシャツを着用して応援合戦を行った。教職員も「何とか児童の願いをかなえてあげたい。」と確実にその意識を向上することができた。そして，本取組による運動会を経験した保護者からは，「はじめのうちは，子どもがここまでできるのかと心配だったが，見てみると子ども中心で，実に堂々とやる気を前面に出していた様子が見られました。子どもの力を信じる大切さを学んだような気がしました。」との感想をいただいた。

表２は，運動会までの三つのプロジェクト活動を取り入れて実施した学校行事等を経験する前（平成20年度）とその後（平成21年度）の児童の意識の変化である。より正しく比較するために対象児童を両年度で同一児童とした。低学年から，高学年まで共通した質問であったため，やや具体性に欠ける質問ではあるが，高学年においては，意欲的，主体的にといったニュアンスも加えられている。この結果から6.4％の児童が学校行事をより楽しく感じるようになっていることが分かり，児童の意識は確実に向上している。楽しく感じるということは自己実現へ一歩近づいていることの表れでもあるととらえている。

表２　学校行事に楽しいと回答した児童の割合

学校での行事等は楽しいですか。	
本取組実施前（平成20年度）	90.2％
対象：平成20年度１年生～５年生（107人）	
本取組実施後（平成21年度）	96.6％
対象：平成21年度２年生～６年生（110人）	

注）両年度とも対象児童は同一児童（転入生３人を含む）

(4) 三つのプロジェクト活動を通して児童と教職員の意識の変化

三つのプロジェクト活動を実践していった結果，次のような意識の変化が認められた。児童は，様々なプロジェクト活動で自主的，実践的に話合いを進めることができた。そして，その内容に沿って実行していくという経験を重ねたことによって，確実に自信へとつながり，自己実現への広がりをもつことができた。教職員は，はじめは，プロジェクト活動や参加児童の【理解】に努めた。児童が意欲的に取り組んでいる様子を目の当たりにして，その活動に【協力】しようと動き出した。そして，前述したように特別活動の全体計画を刷新して，児童の願いをかなえてあげようという意識に高まりが見られ，児童と共にプロジェクト活動に【参画】し，支援にあたるようになった。（図４参照）

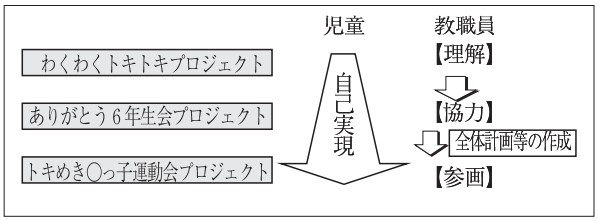

図４　三つのプロジェクト活動を通して児童と教職員の意識の変化

７　まとめと今後の課題

「なすことによって学ぶ」「なす」の部分を運動会を含め，三つに広げることができた。具体的には，児童が主体的に取り組み，自主的，実践的な態度を育てられるシステム「プロジェクト活動」を三つの活動に応用することができた。そうしたことで，児童が主体的，自主的，実践的な活動ができる場をより一層，経験し自己実現に向かっている。

課題としては，やはり，児童の自主的，実践的な活動を保証するための時間を確保しなければならない。どうしても昼休み等の時間に充てるしか手がない状況である。校時表を工夫し，具体的に位置付けていくなど改善を図っていく必要性がある。また，これらの三つの活動で見られた自主的，実践的な態度が，日常の生活に十分生かされていくよう，特別活動だけでなく，各教科，他領域においても児童の主体的な活動を促す視点を重視して指導にあたりたい。

学校は子どものためにある。子どもをど真ん中に据えて教育活動を展開していくことを本実践を通して再確認した。また，このような自己実現を目指す活動が子どもたちの手で代々継承されていくような支援をこれからも続けていく。

引用・参考文献

・柏崎市立田尻小学校『柏崎市刈羽郡学校教育研究指定－教育課程 研究発表会紀要』　2009
・土屋雅朗『児童の主体性を育てる学校行事の取組－自発的な運動会計画集団＝「運動会プロジェクトチーム」の取組を通して－』上越教育大学学校教育総合研究センター『教育実践研究第17集』　2007，pp.199-204
・新潟県教育庁義務教育課『平成21年度新潟県小学校新教育課程研究集会資料』　2009
・新潟日報社『特集：トキ放鳥』〈http://www.niigata-nippo.co.jp/toki/0925-houtyou.html〉　参照2008-09-25
・文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』　東洋館出版社　2008